

浅井了意『勸信念仏集』の成立

——平仮名本による女人勸化の試み——

中 川 眞 二

江戸時代の初め、社会は高度経済成長期を迎える。寛文から延宝、天和、貞享、そして元禄の約四十年間にわたる大幅な経済成長である。そうした状況下、それまでほとんど文化に触れることができなかった一般庶民、商人や町人が経済的に豊かになるにつれて、次第に文化の担い手となっていった。

貞享五（一六八八）年に刊行された井原西鶴の『日本永代蔵』（巻一「波風静かに神通丸」）では、

物じて大坂の手前よろしき人、代々つづきしにはあらず。大方は吉蔵・三助がなりあがり、銀持になり、その時をえて、詩歌、鞠、楊弓、琴、笛、鼓、香会、茶の湯も、おのづからに覚えてよき人付合ひ、むかしの片言もうさりぬ。

と記される。それまでは「吉蔵・三助」、つまり下男だった者が、趣味に使うことができるお金を手に入れることで、「詩歌、鞠、楊弓、琴、笛、鼓、香会、茶の湯」といった文化的な営みに興じるようになったことがわかる。折しも商業出版も盛んになり、庶民が文学の消費者として機能するために、十分な状況が整っていた。

本論文で扱う『勸信念仏集』の成立も、その末に貞享五年戊辰七月上旬沙門了意書²と

とあることから、『日本永代蔵』と同じ時期であることがわかる。つまり、『勸信念仏集』が著された頃には、経済は成長し、寺子屋の普及などを通して、庶民に対する教育も次第に充実し始めていた。商業出版文化も花咲き始めるなかで、庶民は中心的な文学の享受者となつて

いたのである。

この『勸信念仏集』については、個人蔵のものも存在するであろうが、『国書総目録』によると大谷大学図書館蔵本のみが確認されている。内容は、漢字平仮名交じりで、その題名からも明らかのように、読者に対して、「念仏」を勧めるべく、「念仏」の功德について述べようとするものである。小論では、この『勸信念仏集』を通して、浅井了意の平仮名本による「女人教化の試み」について考察していきたい。

ところで、新しく文学の享受者となった庶民に対しては、「平仮名」と「片仮名」のどちらを用いるのが効果的であろうか。文学作品について考えるうえで、それが誰に向かって書かれたものであるかということは、その作品の内容同様、その位置を考えるうえで、重要な意味を持つてくる。そして、その誰に向かって、つまり設定読者を考えるうえで、大きな意味を持つのが、用字の問題である。「平仮名」と「片仮名」のどちらが用いられているかで、その文献が誰に向かって記されたものであるかということが変わってくるのである。

そのことを考えるうえで、注目すべき事例として、寛

文十二年（一六七二）に起こった『本願寺聖人伝絵』（『御伝鈔』）の仮名草子化に関わる事件を挙げることができる。『御伝鈔』を仮名草子化して出版しようとした、書肆鶴屋喜右衛門と親鸞伝浄瑠璃本を刊行しようとした八文字屋八左衛門に対して、東本願寺は「ひらかなに直し土民下臈の類迄心易よみ申候へは家の傳受寺法難相立候」と京都町奉行所に訴える。このことから、東本願寺が、『御伝鈔』の仮名草子化、平仮名化が、「土民下臈の類」、つまり庶民を対象とするものであるという見方をしていたことがわかるのである。⁽³⁾したがって、この時代、平仮名を用いた出版は庶民に読まれることまで意識したものであったことが明らかである。

『勸信念仏集』については、北条秀雄氏が「仮名草子に入れてもよく、純然たる仏書として取り扱うには少々心残りがする」と述べておられる。実際、了意が著した仏書は大方、漢文か漢字片仮名交じりの文体で記されている。しかし、『勸信念仏集』は漢字平仮名交じりで書かれ、その冒頭も、

それ世の中の有さま。人の身の無常なる事行河の流れて。又もとの水にあらぬが如し只何事もみないつ

はりの世に。老と死とのふたつばかりは。まことにして是をのがるゝ人なし今年の姿は去年の形ちに似ず。けふの命はきのふに帰らず。出いる息の程にもかたふくは身のよはひ。つゝまるは命なり。

と、『方丈記』の冒頭部分とよく似た始まり方をしており、その中では『方丈記』同様、人生の無常が嘆かれている。

その後、『勸信念仏集』では十七首の和歌を引用しながら、無常な世を生きる人間の姿が描写される。和歌を用いながら、読者にこの世を生きていくことの難しさ、また仏道に身を捧げようとしても、大きな障りがあるのだということが述べられている。そして、後半部では、救われがたき我々の中でも、特に「女人」の往生について述べられ、その後に「六字名号」の功德が論じられる。つまり、和歌によつて無常の世に生きる人間の姿や苦悩、そしてその救いが描かれているのである。

では、具体的に『勸信念仏集』の前半の内容を見ていきたい。

初めある物は終りあり逢ものには必らず別る比翼連理のかたらひ階老同穴の契りも更にそひはつべき此世ならず中関白通隆公の御むすめ貞子の皇后は一条

院の御きさきなり御なやみおもくおはしける中に

夜とともに契りしことを忘れずはこひん涙の色ぞゆかしき

とかきて御几帳のひもにむすびつけさせ給ひけるをうしなひ奉りて後。かの御らんじつけさせ給ふける御こゝろのうち。忍びがたく覚えさせたまひけん独りむまれし我身なれば。ゆく時も又独り行べし。したしき妻子わりなき友だち。つれてもゆかずつれられもせず。まぼろしの身を夢の世にをきながら。しばしのたのしみに時をうしなひ明日までとおもひのべて無常のことはりを打わすれ後の世のわざけふのつとめにをこたるも。われながらいと口おし。

この部分では『十訓抄』の、

この後のなやみ、重くならせ給ひけるころ、

夜とともに契りしことを忘れずは恋ひむ涙の色ぞゆかしき

と書きて、几帳のひもに結び付け給ひけるを、失せ給ひて、院、御覧じつれたりける。御心中、さこそ忍びがたくおぼえさせ給ひけ⁽⁵⁾め。

という、中宮定子と一条院に関する説話を引用しながら、「比翼連理」、「偕老同穴」、仲がよく信頼し合っている

男女、妻子や友だちであつても、死ぬときは生まれたときと同様独りで、決してともに行くことはできない、人の世の無常について述べられる。

続く部分では、

良峯の少将は深草天皇にをくれ奉りてかなしさのあまりに世をのがれてまことの道に入る遍昭僧正とぞいひけるそのとき深草にこもりて御ちういんのはての日。人々衣を更るよしを聞て

みな人は花の快に成にけり幕の衣よかはきたにせよ

とよみて出ていにつ、諸国を修行して後は花山おこなひけり

という部分において、『古今和歌集』巻十六「哀傷」八四七番の

深草の帝の御時に、蔵人頭にて夜昼馴れつかうまつりけるを、諒闇になりにければ、さらに世にもまじらはずして比叡の山にのぼりて頭おろしてけり。そのまたの年、みな人御服脱ぎて、あるは冠賜はりなど、よろこびけるを聞きてよめる

僧正遍昭

みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ⁽⁶⁾

という和歌が引用されている。実際の典拠は『沙石集』の、

昔、良少将、深草の天皇に後れ奉りて、世を遁れ、実の道に入りて、行ひけれども、かの御名残悲しくて、御果てに、人々衣替ふるよし聞きて、

みな人は花の袂になりにけり苔の衣よかはきだにせよ⁽⁷⁾

であると考えられるが、ここでは大切な人の死に際して、それを悲しむだけで、煩惱のために菩提の種とはできずに、生死の波に漂う凡夫の切なさが述べられている。

このように『勸信念仏集』前半部分では、和歌を引用しながら、無常の世に生きる人間の姿が描かれている。

極楽に往生をしたいと思つても、多くの障りによつて妨げられ、それを叶えることができずに、生死の波にもまれながら生きていくしかない人間の姿を、和歌、つまり文学的な営みを方便として描こうとする姿勢で一貫しているのである。

こうした『勸信念仏集』前半の内容は、後半において

「念仏の功德」を述べるためには必要なことであった。その題目や内容から考えて、本書が著されたのは前半で述べられたような、無常の世に生きる人間、凡夫である我々を救うのが「念仏」、つまり六字名号であるということを読者に勧めるためであった。そして、そのような人間の中でも特に障りの多く救われたいのが「女人」であるというのである。

此たび生死を出て浄土に往生せんと思はゞまづ我身のほどをはかり知べし知恵もかしこく根機もたしかならば。いづれのみのおこなふとも仏には成べきを我らは今末代に生れて知恵つたなく根機鈍し障おほくさとりをろかに。このうへにもろくの戒をたもち行をつとめさとりをみるべきみのりをしへは中々かなふべからずとしるべし

殊更に女人の身は五障の雲あつくかさなり三従の霧ふかくおほふて真如の空に法性の月くもれり自さとりあらはす事かたし。

ここでは、末法の世に生まれた我々は、能力が未熟で、仏教の教えを受けるには素質や能力が備わっていないので、仏道の修行を行っても悟りに到達することはできないと述べられている。そのなかでも、特に「女人」には

五障三従という障りがあるために、仏道における真実を観ることができず、悟りに至ることもできないというのである。

「女人の往生」については、鎌倉時代以降、源空、道元、日蓮、存覚などによって述べられている。

例えば、存覚の『女人往生聞書』のなかで「女人」は、涅槃經ニイハク、所有三千界男子諸煩惱、合集為一人女人之業障。コノ文ノコ、ロハ、アラユル三千界ノ男子ノモロ／＼ノ煩惱ヲアハセアツメテ一人ノ女人ノ業障トストナリ。マタイハク、女人大魔王、能食一切人、現世作纏縛、後生為怨敵。コノ文ノコ、ロハ、女人ハ大魔王ナリ、ヨク一切ノヒトラクラフ、現世ニハ纏縛トナシ後生ニハアタカタキトナル。

心地観經ニイハク、三世諸仏眼墮落於大地、法界諸女人永無成仏願。コノ文ノコ、ロハ、三世ノ諸仏ノマナコハ大地ニオチオツトモ、法界ノモロ／＼ノ女人ハナカク成仏ノ願ナシトナリ。

唯識論ニイハク、女人地獄使永斷仏種子、外面似菩薩內心如夜叉。コノ文ノコ、ロハ、女人ハ地獄ノツ

カヒナリ、ナカク仏ノ種子ヲタツ、ホカノオモテハ菩薩ニニタリ、ウチノコ、ロハ夜又ノコトシトナリ⁽⁸⁾。

と、『涅槃經』、『心地觀經』、『唯識論』などの文言を引きながら、「女人」の罪障の大きさ、また成仏することの難しさ、存在の罪深さ等が述べられている。

『勸信念仏集』の先に挙げた箇所の後においても、牝鶏の晨するは家の索るなりといへり庭島の雌時をつくれば家ほろぶといふ事も夫をさしかたふけ我身さかしらをする事を。いましめたるたとへなり生れて女の身となる事なかれ百年の苦楽は他人によすといへり人にまかする悲しさは。心のまゝに寺まうでして法を聞ことも叶はず思ふとても功德をいとなむ事もならず夫のゆるさねば仏道ねがふにも心にまかせず。いと、罪障ふかきものいつの世に仏にならん事叶難は女の身なり(十七才)それ女人は三世の仏にきらはれてたとひ仏の御まなこはぬけて地におつるとも女は見まじき物と説給へり

と、『書經』や『白氏文集』、また先に挙げた『心地觀經』を引きながら、「女人」が罪深く、往生するのが困難であることが述べられている。

このような『勸信念仏集』における女人観は、源空の『無量壽經釈』や存覚の『女人往生聞書』の影響を大きく受けていると考えられる。例えば、『勸信念仏集』の次に示す部分では、「女人」が日本国中の「靈地靈場」に踏み入ることができない旨の内容が述べられている。

又後の世には十方淨土にきらはれ諸仏の悲願にすてられたるのみにあらず此国わづかの所にだに生れながらえらはれて女はゆくことのかなはさる山々寺々六十余州のあひだに四十八ヶ所ありといふ。まづひえい山は伝教大師の開給ふ一仏乗の峯たかく天真独朗の秋の月は本有常住の(十八才)空にか、やけども女人業障の闇をてらさず三觀円融の土こまやかに中道実相の春の花は一念三千の梢にひらけども女人愛執の目にはみる事なし般若解脱の日あたゝかにして業苦の水はとくるときけども法身のもとをうしなひ煩惱の霧ふかくとざして雲母坂を限りて女は影をだに入べからず次に高野山は空海和尚の創絵ふ九識本有の台のうへには。八葉の心蓮あざやかにひらけ瑜伽上乘の炉中には四曼不離の香煙かうばしく薫れども女人嫉妬の肌にはかうふらず三密加持の池の中には(十九才)五瓶の知水を湛しかども女人垢穢の

まよひをばす、がず阿字本不生の玉殿のまへには法界実理の三摩地門をひらき六大無碍の大道はありと知ながら不動坂をへだて、女は足を容へからず。醍醐寺は聖宝上人の草創なり阿遮一睨の窓の前には鬼神も手をつかねて降をこひ多隸三喙の床の上には魔軍肝消ておそれをなし現世の利やく限りなく後生の徳用量りを知らず効驗名高き山なれども上の醍醐坂をかぎりに女は裾を入べからず笠置寺は弥勒の座し給ふ所兜卒内院の化(十九ウ)儀をうつし五十六億七千万年龍華三会の暁を待て梅咀哩耶の成道を期し給ふ当来の仏の付属に預かる等覺の薩埵なりといへども女はいやしめられて壇上にのぼる事を得ず

其外諸方のあひだに女人をさらはれし所々いふに及はず哀なるかな両の眼はありながらおがまざる靈仏靈像あり悲しきかなふたつの足はそなへながら。ふまざる靈地靈場ありかゝる有為の世の中にだにさらはれいましめられたる浅ましき女の身の我はがほなる有さまさこそ仏は見給ふらんといと、恥悲しむべし(二十オ)

『勸信念仏集』のこの部分では、「ひえい山」、「高野山」、「醍醐寺」、「笠置寺」等の靈場に、「女人」が踏み

入ることができないということ、加えて、その「浅まし」さゆえに世の中に嫌われ、両目両足を備えていながらも、それ以外の靈地にも訪れることができない「女人」の存在について述べている。

この部分は、源空の『無量寿経釈』や存覚の『女人往生聞書』を典拠としていると考えられる。

此日本国サシモ貴無止靈地、靈驗砌皆悉被嫌云々、先比叡山是伝教大師建立、桓武天皇之御願也、大師自結界堺谷局峯不入女人形、一乘峯高立五障之雲無聳、一味之谷深三從之水無流、藥師医王靈像聞耳不視眼、大師結界靈地遠見近不臨、高野山者弘法大師結界峯、真言上乘繁昌之地、三密之月輪雖普照、不照女人非器之闇、五瓶之智水雖等流不灑女身垢穢之質、於此等所尚有其障、何況於出過三界道之淨土之哉、加之又聖武天王御願十六丈金銅舍那前、遙雖拜見之尚不入扉内、天智天王之建立五丈石像弥勒前、高仰雖禮拜之尚壇上有障、乃至金峯雲上、醍醐霞中、女人不影、悲哉雖備兩足有不登法峯、有不沓仏庭、恥哉雖兩眼明有不見靈地、有不拜靈像、此穢土瓦礫荆棘之山、泥木素像仏有障、何況衆宝合成之淨土、万徳究竟之仏乎、因茲往生可有其疑故、鑑此理別有

此願云々⁽⁹⁾

〔無量壽經釈〕

コノ日本国ニモ、タウトクヤンコトナキ靈地靈驗ノミキリニハ、ミナコト／＼クキラハル。マツ比叡山ハ、コレ伝教大師ノ建立、桓武天皇ノ御願ナリ。大師ミツカラ結界シテ、タニヲサカヒミネヲカキリテ女人ノカタチヲイレス、一乗ノミネタカクソハタチテ五障ノクモクナヒクコトナク、一味ノタニフカタタ、ヘテ三從ノミツナカル、コトナシ。藥師匠王ノ靈像ミ、ニキキテマナコニミス、大師結界ノ靈地トヤクミテチカクノソマス。高野山ハ弘法大師結界ノミネ、真言上乘繁昌ノ地ナリ。三密ノ月輪アマネクテラストイヘトモ女人非器ノヤミヲハテラサス、五瓶ノ智水ヒトシクナカルトイヘトモ女人垢穢ノスカタニハソ、カス。コレラノトコロニライテナヲソノサハリアリ、イハンヤ出過三界道ノ淨土ニライテヤ。シカノミナラス東大寺ハ聖武天皇ノ御願ナリ、ソノ十六丈金剛ノ遮那ノマヘ、ハルカニコレヲ拝見ストイヘトモトヒラノウチニハイラス。笠置寺ハ天智天皇ノ建立ナリ、カノ五丈石像ノ弥勒ノマヘ、タカクアフィテコレヲ礼拝ストイヘトモ、ナラ壇ノウ

ヘニハハ、カリアリ。乃至金峯山ノクモノウヘ、男子ニアラサレハイタルコトナク、カミノ醍醐ノカスミノウチ女身ヲモテオムカス。カナシキカナ、フタツノアシヲソナヘタリトイヘトモ、ノホラサル法峰アリ、フマサル仏庭アリ。ハツカシキカナ、フタツノマナコヲ具セリトイヘトモ、ミサル靈地アリ、拝セサル靈像アリ。

〔女人往生聞書〕

『無量壽經釈』では、「比叡山」、「高野山」、「東大寺」、「崇福寺」、「金峯山」、「醍醐寺」に踏み入ることができない「女人」が、そして、『女人往生聞書』では、「比叡山」、「高野山」、「東大寺」、「笠置寺」、「金峯山」、「醍醐寺」に入ることができない「女人」の存在が述べられている。両書には、「崇福寺」と「笠置寺」の相違があるが、『勸信念仏集』では「笠置寺」とあるので、直接的には『女人往生聞書』を典拠として考えると考えてもよいであろう。いずれにしても、『勸信念仏集』はこの両書の影響を受けたものであることに間違いない。

そこで、もう少し『勸信念仏集』と『女人往生聞書』の本文を比較する。『勸信念仏集』では、『女人往生聞書』と比較して、「女人」や「女」ということが多く見られる。例えば、『勸信念仏集』において、「ひえい

山」に関する部分では、「女人業障の闇をてらさず」、「女人愛執の目にはみる事なし」、「女は影をだに入べからず」と三カ所で「女人」や「女」ということばが用いられている。続く「高野山」に関する部分でも、「女人嫉妬の肌にはかうふらず」、「女人垢穢のまよひをばす、がず」、「女は足を容へからず」と三カ所で「女人」や「女」ということばが用いられる。その後の「醍醐寺」の部分では、「女は裾を入べからず」、そして「笠置寺」の部分では、「女はいやしめられて壇上にのぼる事を得ず」と続く。このように、『勸信念仏集』では、全部で八カ所、「女人」や「女」が使用されている。

しかし、これに対して『女人往生聞書』では、「比叡山」の「女人のかたちをいれず」、「高野山」の「女人非器のやみをばてらさず」、「女人垢穢のすがたにはそゝがず」、「醍醐寺」の「女身をもておもむかず」と全部で四カ所しか用いられていない。これは『無量寿経釈』についても同様である。

これは、どのような事情によるのであろうか。考えられるのは、『勸信念仏集』では、「女人」や「女」がそれだけ障りの多い存在であることが強調されているということであろう。これは、先ほど述べた、「女人」には五

障三従という障りがあるために、仏道における真実を観ることができず、悟りに至ることもできないということとを裏付けするものではないだろうか。「女人」ということばを多く用いることにより、障りのために、霊地霊場にさえ踏み入ることができない存在である「女人」がクローズアップされるのである。そして、その数の多さゆえ、そのことがより説明的に読者に提示されることになる。十方に無量無辺に存在する諸仏の浄土に嫌われ、諸仏の悲願に捨てられた「女人」には、現世においても行くことができない霊場が多く存在するのだということが、より明確に語られることになる。

このように、『勸信念仏集』では、『無量寿経釈』や『女人往生聞書』の影響を受けながらも、より具体的に「女人」がおかれている、成仏するのが難しい境遇について述べようとする、作者了意の意図が読み取れるのである。

そして、『勸信念仏集』続く部分では、「女人」が成仏するには、『法華経』では無理であるということが述べられる。

法華経は如来一代の経王出世の本懐なるか故に五逆

の提婆は天王如来の記別をうけ八歳の龍女は南方無垢の成道をとげたり。罪惡も女質もみな成仏す此經の徳用にまざる法なしとて諸經を爾前の法とて貶め成仏せずといへるは極たるひが事なり法花經より以前四十余年のみのりをうけて死たる者は釈迦にすかされあざむかれて地ごくにおつべきや爾前の經をいつはり也といはゞ法花經もまた真なるべからず法花にて成仏せば諸經にても成仏すべし

(中略)

かくて女は池に入て法花經をいたゞきける功德によりて娑竭羅龍王の娘に生れ年初めて八歳なり利根聰明にして文殊の教化に依て成仏せしといへり知恵もなく根機に叶はざる今の時の愚痴の女人かの龍女におなじからんとおもふは猫の虎に似たりと思ひ鶏の鳳凰にひとしと慢したらんが如しまして法花經には無知の人の中にしては此經を説ことなかれといひ或はわが法は妙にして思ひがたしことばをもつてのおへからずとの給へりいかでか末代の女人此經をさとりてすみやかに成仏すへきや

「此經の徳用にまざる法なしとて諸經を爾前の法とて貶め成仏せずといへるは極たるひが事なり」と、法華經

以前の經典を否定し、法華經に勝る經典はないというのは間違ひであり、「爾前の經をいつはり也といはゞ法花經もまた真なるべからず法花にて成仏せば諸經にても成仏すべし」と、「法華經」以前の經典を偽りであるといふのなら、「法華經」自体も偽りであり、法華經によつて成仏できるのであれば、それ以外の經典でもそれが叶うはずであるという説を展開している。

そして、「知恵もなく根機に叶はざる今の時の愚痴の女人かの龍女におなじからんとおもふは猫の虎に似たりと思ひ鶏の鳳凰にひとしと慢したらんが如しまして法花經には無知の人の中にしては此經を説ことなかれといひ或はわが法は妙にして思ひがたしことばをもつてのおへからずとの給へりいかでか末代の女人此經をさとりてすみやかに成仏すへきや」と、「知恵もなく根機に叶はざる今の時の愚痴の女人」、末法に生まれた知恵もなく、仏の教えを受ける才能がない「女人」は、「いかでか末代の女人此經をさとりてすみやかに成仏すへきや」と、「法華經」では成仏できないのだと結論づけている。

このような「法華經」の否定は、『無量壽經釈』や『女人往生聞書』では述べられていない。「念仏」の効力、「念仏」によつて成仏は叶うのだということを述べ

ようにするうえで、それ以外の方法、例えば、「法華經」による成仏は否定されるのは当然であろう。しかし逆に考えると、否定しなければならないほど「法華經」の影響力は大きかったとも考えられる。

続いて、「女人」が成仏するためには「念仏」しかないのだということが述べられる。

抑淨土の經には弥陀の四十八願にまさしく女人成仏の誓をたて諸仏にすてられたるもの只此誓願ならではたすかるへからずその教は六字の名号なり此名号は三世諸仏のほめ給ふところいま一代の經のちいづれもほめて説給へり又法華經の藥王品には男子も女人ももしこの法華經を誦誦して安樂世界に往生せんとながふものは則ち念に應じて安樂世界阿弥陀仏のみもとに往生すへしと説給へり極樂を願はん輩法華經よりは名号をとなへて直に往生をとぐべしまた藥師經には此藥師經をどくじゆして西方淨土へ往生すべしと思はゞ八大菩薩にをくらせて極樂にゆかしめんと説給へり淨土をねがはん人は藥師經までもなく直に弥陀の本願を頼み聖衆の迎にあづかり心やすく往生をとぐべきなり諸經にはむる所。おほくは弥陀

にありと天台大師もの給へり行しやすく往やすきは此念仏に過たるはなし

この場合の「女人成仏の誓」とは、四十八願のうちの第三十五願を指すと考えられる。この第三十五願は、親鸞聖人の『淨土和讃』では、

弥陀の大悲ふかければ

仏智の不思議をあらはして

變成男子の願をたて

女人成仏ちかひたり⁽¹⁹⁾

と詠われ、第三十五願は「變成男子の願」と記されている。また、存覚上人の『女人往生聞書』においても、弥陀如来の四十八願のなかに、第三十五の願は女人往生の願なり。あるひはこれを転女成男の願といひ、あるひはまた聞名転女の願となづく。その願文（大經卷上）には、「設我得仏、十方世界其有女人、聞我名字、歡喜信樂、發菩提心、厭惡女身。壽終之後、復為女像者、不取正覺」この文のこゝろは、たとひわれ仏をえたらんに、十方世界にそれ女人ありて、わが名字をききて歡喜信樂し、菩提心をおこして女身を厭惡せん、いのちをはりてのちまた女像とならば正覺をとらじとなり。

と、「転女成男の願」や「聞名転女の願」と述べられている。その第三十五願を前提としながら、「極楽を願はん輩法花経よりは名号をとなくて直に往生をとぐべし」、「浄土をねがはん人は薬師経までもなく直に弥陀の本願を頼み聖衆の迎にあづかり心やすく往生をとぐべきなり」、「行しやすく往やすきは此念仏に過たるはなし」と、知恵や根拠もない末代の女人が成仏するためには、「法花経」や「薬師経」ではなく、「行しやす」い「念仏」、六字名号を唱えることしかないのだと展開する。

しかし、ここで注目すべきことがある。それは、『勸信念仏集』では「女人成仏の誓」とは述べられているが、『浄土和讃』や『女人往生聞書』のように、「変成男子」ということが用いられていないということである。

『勸信念仏集』と同じく浅井了意が、万治三年、一六六〇年に著したと考えられている、『法花経利益物語』には、「安居県様少女」や「外国清信女」といった「変成男子」によって往生した「女人」たちが登場する。

『法花経利益物語』という書名から明らかのように、「変成男子」による往生が描かれるのも当然のことであろう。しかし、「法華経」について否定的に描かれる『勸信念仏集』では、「変成男子」による往生が描かれ

ないのも自然の流れかもしれない。『勸信念仏集』は、「念仏による成仏」の重要性を示すために著されたものである。『法華経』や「竜女」の往生を否定している立場から考えれば、「変成男子」という要素が除外されたのも、構成上当然のことであろう。

さらに、「変成男子」が描かれなかった理由として、もうひとつ重要なことが考えられる。浅井了意は、数多くの仮名草子や仏書の出版に関わっている。当代一の作家であると同時に、有能な編集者でもあったと考えてよいであろう。当然、時代の流れを感じる彼の感性には並々ならぬものがあつたと想像される。『勸信念仏集』が書かれた時期は、女性も含む庶民が文化の担い手として力を持ち始めていた。そのなか、『勸信念仏集』の成立に先立つ、貞享三（一六八六）年には、井原西鶴による『好色五人女』が出版されている。『好色五人女』では、遊女ではない、自分の意志で自分の行動を決める女性、自立した女性の姿が描かれている。そのような意志を持つ女性を描くことが可能になった時代、「変成男子」、つまり「男子」にならなければ成仏できない「女性」の姿を描くことは、時代に逆行することになるのではないだろうか。同時にそれは、そのまま書物の販売にも逆効

果であろう。有能な編集者であった了意がそれに気づかないわけではない。了意には、そのような時代の流れを読む目があつたはずである。

では、了意はこの『勸信念仏集』によって何を試みたのであろうか。

繰り返しになるが、『勸信念仏集』では五障三従の障りが多く、知恵も根拠もない末代の女人であつても、「法華経」を読誦することによってではなく、「念仏」を唱えることによって成仏できるのだということが述べられていた。その意味で、『勸信念仏集』は、「念仏」の功德を述べるための勸化本であると考えてもよいであろう。

そのなかで注目すべきは、了意が『勸信念仏集』を平仮名で著したということである。平仮名で出版するということは、想定読者は庶民ということになる。もちろんそこには女性も含まれていたであろう。了意は、『勸信念仏集』において、文字を通しての教化、「読む」ことによる教化を目指したのではないだろうか。了意は、道場等で語られる、逆に言うところ「聞かれる」ことによってではなく、読者によって「読まれる」ことによって、

「念仏」の尊さを伝えようとしたのではないだろうか。つまり、元禄元年、浅井了意は『御文』のような音声による間接教化ではなく、文字による直接教化を試みようとしたと考えられるのである。了意は、『無量寿経釈』から『女人往生聞書』、そして『御文』へとつながる「女人往生」について、わかりやすく述べることで女人教化を試みようとしたのではないか。

以上、元禄元年に、実際には貞享五年であるが、『勸信念仏集』の刊行を通して、浅井了意が試みた「読む」ことによる女人教化について考察してきた。後半の「六字名号」について述べた部分の考察は次稿にゆずるが、浅井了意が、漢字片仮名による勸化本や通俗仏書による知識階層の教化だけではなく、仏書の仮名草子化、つまり文学という方便を用いて、直接庶民教化を行おうとした可能性は高い。

補注

- (1) 『日本永代蔵』の本文は、『新編日本古典文学全集 68 井原西鶴集 3』（小学館）による。
- (2) 『勸信念仏集』の本文は、大谷大学図書館蔵『勸信念仏集』（宗大 二六二八）による。
- (3) 『本願寺聖人伝絵』の出版に関しては、大谷大学図書

館蔵『粟津家記録』『浄瑠璃本平太郎記版行一件』（函号
関函十六）に、

一開山聖人縁起上下巻之儀は従先規寺法として諸末
寺之族望に任せ拝讀之儀許容之上役人傳受せしむ
る作法に而候故中々末々に而私として拝見難成書
物に而御座候ひらかなに直し土民下臈の類迄心易
よみ申候へは家の傳受寺法難相立候其上右草紙之
内の繪は於本寺役人候而繪傳四幅に調御門跡自筆
に而裏書被認未寺共へ授与候其礼式有之事に候然
者旁以寺法之障に罷成候如御存知當本願寺儀は御
公儀より御知行不被遣候得共如此の作法を以末寺
門徒の助成として相立義に御座候間諸宗格別之道
理御聞届被成可被下候事
とある。

- (4) 『新修 浅井了意』（笠間書院）による。
- (5) 『十訓抄』の本文は、『新編日本古典文学全集51 十訓抄』（小学館）による。
- (6) 『古今和歌集』の本文は、『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』（小学館）による。
- (7) 『沙石集』の本文は、『新編日本古典文学全集52 沙石集』（小学館）による。
- (8) 『女人往生聞書』の本文は、『真宗史料集成 第一巻 親鸞と初期教団』（同朋舎）による。
- (9) 『無量寿経釈』の本文は、『日本思想大系10 法然・一遍』（岩波書店）による。
- (10) 『浄土和讃』の本文は、『岩波文庫 親鸞和讃集』（岩

波書店）による。

（本学准教授）